

学校教育目標	ともに学び合い、未来を創る子供の育成		
a ミッション	小中連携教育を基盤とした確かな学力の育成	a ビジョン	○児童の主体性を育み、未来につながる学力をつける学校 ○幼・小・中の連携を深め、学び合いにより相互に高め合う学校 ○家庭・地域とともに、子供の育ちを考える学校

尾道市立美木原小学校

評価計画				自己評価				学校関係者評価			改善計画			
b 中期経営目標	c 短期経営目標	d 目標達成のための方策	e 評価指標	f 目標値	7月達成値	1月達成値	h 達成度	i 評価	j 結果と課題の説明	k 二次評価			l コメント	m 改善案
				①80%以上	②未実施	③84%	103%	A		イ	ロ	ハ		
学びを創る 確かな学力の育成	読解力の向上	①「言葉」を手がかりにした「読むこと」の指導。 ・計画的な校内研修の実施 ・授業内に話すこと・読むこと・書くことを取り入れる。 ②基礎学力を高めるためのドリルタイムの充実。 ・全員が集中して取り組む10分間の実現。 ・毎回のドリルタイムで音読に5分以上取り組む。 ③話し合い活動の充実 ・互いの考えを伝え合う時間を毎時間の授業内に設定する。	①国語科単元末・学期末テスト（思考・判断・表現）80点以上の児童の割合 ②標準学力調査の通過率「読むこと」全国平均以上の児童の割合（国語科） ③児童アンケートの肯定的評価	①80%以上	①81%	①79%	103%	A	・国語科単元末・学期末テストの読み取り領域において、80点以上の児童の割合が79.5%であった。上半期と比較すると1.5%下がったが、概ね80%に達している。フレームリーディングを取り入れた読む活動で、読み取る力は高まっているが、学んだことを次の学習へ生かしていかない。 ・確かな学力の育成に係る児童アンケートにおいて、2学期末の肯定的評価は86%であった。項目で見ると、「ドリルタイムに、集中して取り組んでいます」については88%と高く、他学年との交流の場をもつことで、学び方や取り組み方を改善し、意欲向上につながった。また、「ふりかえりでは、『どこまで分かったか』『もっと考えてみたいこと』を考えています。」については81%で、前回の76%から5%上がった。学習の始めに見直しをもたせることで、学習を振り返る時間も確保できている。	3			・本に親しむ環境づくりの継続はきっと力になります。すぐに結果（点数）につながらなくても積み上げていくことで文章を読み取るくせがつかます。ヒプリオバトルの賞の向上もいいですね。今の取組を続けていってほしいと思います。 ・楽しいで学習に取り組む環境づくり、お互いを褒め合う人間関係、ドリルタイムの充実を願っています。	・80点に達しなかった児童の誤答分析から実態を把握し、学習内容の定着に向けた繰り返し学習や補教の時間を設定していく。また、授業の中では既習事項を提示し、ペア学習やグループ学習などアウトプットする場を設け、活動内容を視覚化して、読みを深めるために思考を回していく活動を行っていく。 ・授業の振り返り時間の設定し、一人一人が自分の学びの成長が足跡として残っていくノート作りや言語活動等を行っていく。
生活を創る 「学校生活を創る」主体的で実践的な力の育成	主体性の向上	①学級活動の充実 ・児童主体の話し合い活動（形式を統一） ②委員会活動の充実 ・児童主体の児童集会等の実施（月に一度の児童集会、全校発表、イベント活動、半期に1回以上）	①児童アンケートの肯定的回答の割合（7月・12月実施） ・学級活動について（全学級） ・委員会活動について（5・6年）	80%以上	120%	①103% ②125%	142%	A	・2学期の児童アンケートの結果、肯定的評価をした児童の割合は、学級活動については86.5%で、委員会活動については100%だった。 ・自分の考えを発表する児童が固定化されている。どの学級も月に1回以上クラス会議を行っており、自分の考えを友達に伝える機会を設けているため、今後は話し合い活動を何のために行うのかなど、話し合い活動の目的を児童一人一人に把握させる。 ・どの委員会も半期に1回以上イベントを企画し、主体的な活動ができた。	3			・学級活動や委員会活動に、まっすぐ取り組んでいるのを感じます。与えられたものより、自分達で考えた内容がうまくいって楽しめたときの嬉しさが、次の原動力になるのでしよう。先生方もそれを認めて、一緒に楽しむ姿を見せることも子供達のモチベーションを高められると思います。 ・話すことが苦手な児童にとって、話しやすい雰囲気づくりが大切なので、せかさず温かく見守ってほしい。	・児童会活動を中心とした挨拶運動や教職員による率先垂範の徹底による挨拶の励行を通して、思いやりの心を育て、主体的に挨拶ができる児童の育成を図る。 ・話し合い活動では、どの児童も司会や記録等の役割をもてるように、話し合い活動進行表や話し合い活動記録用紙を学校全体で活用しながら責任をもって話し合い活動に臨むようにさせる。 ・どの委員会も半期に一回以上イベントを企画していたが、趣旨が曖昧な活動もあったので、課題意識をもって計画的に委員会活動に取り組みさせる必要がある。
働き方改革 豊かな教育活動の実践	働き方の質の向上	学級・学年間交流を通じた複数指導による協働的な働き方の実践	教職員アンケート「組織の一員として協働的な働き方ができた」の肯定的回答（7月・12月）	85%以上	105.0%	117.0%	137.0%	A	・下半期は上半期の教職員アンケートの結果からさらに12%上回ることができた。複数体制で協力しながら指導ができることに安心感をもつことができている職員が多い。また、日常的にコミュニケーションをとることで、職員同士の関係性が働き方の向上につながった。課題としては複数体制による効果的な指導の工夫が必要である。また分掌部会においては、早期に計画を立て、組織としての機能を充実させていく必要がある。	3			・効果的な授業を図るために職員間で授業の見直しを共有することで学習のめあてを明確にし、適切な支援を行うことで「できた」「わかった」と思える授業を展開する。 ・分掌部会を活性化させるため、計画の見直しを明確にし、記録をファイルして全職員が内容を理解できるようにすることで、協力体制を強化し組織的な取組を進める。	

【自己評価 評価】

A : 100 ≧ (目標達成)
C : 60 ≧ (もう少し) < 80

B : 80 ≧ (ほぼ達成) < 100
D : (できていない) < 60

【外部評価】 イ : 自己評価は適正である。ロ : 自己評価は適正でない。ハ : わからない。